

# 劇団☆新感線公演 炎のハイパーステップ

1985年4月12日～14日 扇町ミュージアムスクエア

## キャスト

天宮舞紀……………白石恭子  
北枕仁…………… 枯暮修  
手向井翔…………… 古田新太  
立花ひかる…………… 金山てるみ  
桃園ミカ…………… 倉石ユリコ  
老忠林…………… 竹田団吾  
桂木ジュン…………… 前田ミカ  
矢吹レイ…………… 島田ミキ  
南宮芽子…………… 森下祐巳子  
岸田俊介…………… 猪上秀徳

## スタッフ

作…………… 中島かずき  
演出…………… いのうえひでのり  
舞台監督…………… 松林克明  
照明…………… 杉山正男  
音効…………… 堂岡俊弘  
小道具…………… 竹田団吾  
宣伝美術…………… 藤井昌浩

## あとがき

「炎のハイパーステップ」は、初めて劇団☆新感線に書き下ろした作品だ。

それ以前僕はいのうえひでのりと一緒に福岡でユニットを作って芝居をやっていた。20歳の頃の話だ。僕は東京、いのうえは大阪とお互いバラバラではあったがそこは学生の身、学校がある間僕が東京でホンを書き、夏休みと春休みを利用して年一回故郷の福岡で公演を行っていた。

作・演出は僕、役者やスタッフにはいのうえや逆木圭一郎、竹田団吾、東京公演を始めた頃まで新感線の制作を務めてくれた大石時雄など、新感線にもゆかりの深いメンバーがいたユニットだ。

途中、いのうえは大阪芸大の方で劇団☆新感線の活動も始めていたので、彼は一年中芝居三昧の日々だったはずだ。僕の就職がきっかけで福岡のユニットは解散したが、いのうえ率いる新感線は、つか作品の上演を中心とした当時の関西学生演劇ムーブメントの中心劇団の一つとなっていた。その新感線がつか作品と訣別し、寛利夫(当時十三)渡辺いっけいという主戦力が抜け、オリジナル路線に転換したのと、こちらが無性にホンを書きたくなったのとはどっちが先だったか。多分、微妙にリンクしてるんだろ。

とにかく新感線オリジナル路線第一弾『宇宙防衛軍ヒデマロ』を観に大阪に行ったときに、僕はいのうえに「台本を書かせてくれなにか」と頼んだのは覚えている。

その頃、僕は憧れて入ったはずの出版社でなかなか思った通りの仕事が出来ず、彼女にもふられてタークな日々を送っている頃で、「こんなにグチグチ男とか女とか人生とか悩んでるんだしたら、その頭使ってホンでも書いてやれ」と思ったのだ。

一緒に芝居を作っていたよしみか、いのうえはすんなりとOKしてくれて、かくして「炎のハイパーステップ」は誕生したのだ。久しぶりに書く芝居の台本は実に楽しかった。

男とか女とか人生とかグチグチ悩んでる頭使ったわりには「筋肉が異常増殖するダンサー」だの「アフリカ帰りの踊るはた迷惑」だの「パワードスーツ対殺人卓球」だの「地下格闘技組織」だのが並ぶ芝居になってしまったのは、これももう己の血がなせる業というしかない(笑)。

但し、こっこの感じが入りすぎたのか、実際の舞台になってみると主役の白石恭子は2時間20分殆ど出ずっぱりでしゃべりまくり

踊りまくる一人トライアスロンの様相を呈していた。稽古を重ねていく間に、どんどん筋肉がついてきてたくましくなっていく主演女優というのにはさすがにどうだろうと、自分でも思わないうちでもなかった。それまでアマチュアに毛が生えたような連中に書いていたのが、一ランク上の役者に書けるというのが嬉しかったのだ。構成のバランスが悪かったのだ。

もっとも、今年の8月にやった「阿修羅城の鐘」で、主演の市川染五郎氏にも出さずっぱり喋りっぱなし立ち回りっぱなしという同様に過酷なことをやらせているので、あまり反省しているとも言えないか。そういえば彼も白石も、本番中にどんどん体重が増えていくというところまでおなじだ。食べないと体力がもたないと言ったことなんだろう。

1985年4月、ちょうど扇町ミュージアムスクエアがオープンした時期で、「炎のハイパーステップ」はそのこけろ落としの一つでもあったはずだ。

つか作品を演じている頃に比べると観客数は激減したが、とりあえずミュージアムスクエアの二階に稽古場を持ち、新新感線は試行錯誤ではあるが、ゆっくりと新しいステップへと進みはじめた感じは、はたで見てもいたのだった。

そしてなにより、古田新太という肉体に出会ったことが、僕にとっては大きな収穫だった。

僕の台詞は、トーンの切り返しとリズム感に支えられている。いくら芝居がうまくても、あんまり自分の感情にはまられると成立しないところがあるのだ。

そういう意味では、古田の演技は僕の感覚とか資質とかにとってもよくあった。

浮いたトーンとシリアスなトーンの切り返し、妙な腰の動きも含めてよく動く身体。

そのころまだ20代になりたてがそのころの、若い、スケベ黒子の目立つ、キレのいい身体を持つ男になら、いろんなホンが書けそうだった。

実際この時書いた金持ちのボンボンの「手向井翔」というキャラクターが惜しくて、一年後に白石とともに主役に据えて「ハイパーステップの伝説」という芝居に書き直したりしているし、ああ、そうだ、書いていてだんだん思い出してきたが「ハイパーステップ：シリーズ」というのは三部作で、第二次大戦前の中国を舞台に、手向井財閥の礎を築いた「手向井五門」と中国四千年の間に伝わる幻の舞踏「天地陰陽」を踊る女性との恋愛を描いた戦前篇のアイデアがあったんだ。

いのうえの「新感線でダンスを軸にした芝居は厳しいよ。ダンサーじゃやないんだから」という言葉であきらめたのだが。

ううむ。すぐにシリーズ化したがるのは昔からだったんだなあ。

なかなか、人間というのは、一つの穴しか掘れないもんです。

いやいや、書いてくうちに、自分でも思わぬ方向に転がってしまいました。

「炎のハイパーステップ」『星の忍び』『THE STRANGE STAR CHILD』『夢見る無法者』という、この三冊を初期三部作と暫定的に言うておくけど、ともかくにもこんなマニアックな作品が出せたのも演劇ぶっく社の決断と、常に書き手に刺激を与えてくれた劇団☆新感線という集団のおかげです。彼らがいなかったら、芝居書き続けるかどうかかわからないもんなあ。

そして何より、こんなに初期の作品を読んで下さったみなさんに感謝します。

では、また。  
2000年10月 中島かずき